

結城紬 — Yuki Tsumugi —

結城紬は、結城市を中心とした鬼怒川の両岸約20キロメートルの地域で作られている高級絹織物です。鬼怒川流域は古代から農耕が栄え、カイコのエサとなる桑の生育に適していました。カイコは成長すると繭（まゆ）を作り、繭から取った繊維が絹（シルク）です。結城紬は絹糸を織って作られます。

今回は、意外と知らない繭から結城紬になるまでの過程と、教育における結城紬の授業をご紹介します。

問合せ先

- 製品・振興について
市商工観光課 TEL 34-0420
- 歴史・文化財について
市生涯学習課 TEL 32-1931
- 教育について
市指導課 TEL 32-9971

結城紬のあゆみ

結城紬の誕生

遠い昔、崇神天皇の時代に三野（美濃）の国から多屋命（おおねのみこと）が常陸国久慈郡（常陸太田市）に移り住み、長幡部紬（ながはたべのあしぎぬ）という織物を始めました。常陸国から朝廷に献上された紬の一部が、東大寺正倉院に保管されています。紬が結城地方に伝わり、これが結城紬の原型といわれています。

鎌倉時代には、見た目が質実で丈夫なことから武士に好まれるようになりました。室町時代になると、結城地方を治めていた結城家から幕府へ献上されるようになり、結城紬としての名称が定着していったといわれています。



桑の葉がカイコのエサに

技術の発達

結城家18代秀康の越前（福井県福井市）転封により代官支配となった江戸時代初頭、代官・伊奈備前守忠次は、信州上田（長野県上田市）から職人を招き、染色と縮織りの技術を導入し、結城紬の発展に尽力しました。

文献上初めて「結城紬」の名称が登場したのは、1645（正保元）年刊行の「毛吹草」です。江戸時代中期に発行された百科事典である「和漢三才図会」には、結城紬が最上品の紬として紹介されています。

明治時代になると、緋（かすり）技術の開発が進み、現代に見られる亀甲柄などの複雑で精巧な緋模様の生産が可能になりました。明治後期には、強いより糸を使用した縮織（茨城県指定無形文化財、1953年）も織られるようになりました。緋模様を仕組んだ縮織は老若男女に受け入れられ、伝統の平織を凌ぐようになりました。

以後、他産地の織物は産業として近代化を進めていくのに対し、伝統的な方法による生産の維持という路線を選んでいきました。戦後復興の中で、結城紬の文化財指定への機運が高まり、1956（昭和31）年に結城紬（平織）が国の重要無形文化財に指定されました。2010（平成22年）には、ユネスコ無形文化遺産に登録され、世界からもその文化的な価値を認められています。昭和後期に生産数はピークを迎え、着物ばなれなどにより生産数は減少していますが、現在では結城紬を使ったネクタイやショールなど新しい商品開発や販路拡大を推進しています。



カイコから繭玉へ



真綿と手つむぎ糸